

山鳥場遺跡出土の種実圧痕が残る縄文土器

長野県埋蔵文化財センター

1 概要

出土遺跡：山鳥場遺跡（朝日村大字西洗馬 1448-1 ほか）

調査原因：長野県松本建設事務所による県単道路改築事業（一）御馬越塩尻（停）線工事

出土年月日：平成 28 年 10 月 7 日ほか

名称：種実圧痕が残る縄文土器

内容：

- ・ 竪穴建物跡から出土した唐草文土器（中期後半、約 4,500 年前）の外表面・内面および胎土中に、種実の圧痕と思われる痕跡が確認された。圧痕にシリコン樹脂を注入し、作成したレプリカにより種実の同定を行った。また、土器の胎土中に残存していた炭化種実の同定を行った（同定は株式会社パレオ・ラボによる）。
- ・ 同定試料は略完形 1 個体から 5 点（うち 1 点は炭化種実）、破片 5 個体から各 1 点、合計 10 点である。試料の詳細および同定結果は表 1 のとおりである。

No.	種類	遺構	層位	器種	同定結果		法量(mm)			簡易楕円体体積
					分類群	部位	長さ	幅	厚さ	
1	炭化種実	SB 7	埋土	深鉢形	エゴマ	果実	(1.59)	(1.41)		
2	圧痕レプリカ				エゴマ	果実	2.58	2.32		
3	圧痕レプリカ				エゴマ	種実	2.77	2.16		
4	圧痕レプリカ				エゴマ	果実	2.40	2.40		
5	圧痕レプリカ				エゴマ	果実	2.34	2.19		
6	圧痕レプリカ	SB 5	埋土	深鉢形	ダイズ属	種子	11.68	6.26	4.28	163.9
7	圧痕レプリカ	SB 7	埋土	深鉢形	エゴマ	果実	(2.34)	2.18		
8	圧痕レプリカ	SB 7	埋土	深鉢形	ササゲ属アズキ亜属	種子	4.42	(3.38)	(2.27)	21.3
9	圧痕レプリカ	SB 5	埋土	深鉢形	ササゲ属アズキ亜属	種子	6.72	3.60	3.65	46.2
10	圧痕レプリカ	SB 9	埋土	深鉢形	ダイズ属	種子	8.84	5.08	(4.01)	94.3

表 1 種実圧痕の同定結果

* No. 1～5 は同一個体。法量中の（ ）は計測可能な数値を示す。簡易楕円体体積の単位は mm³

* 簡易楕円体体積：ダイズ属とアズキ亜属の種子の堆積

2 意義

エゴマはシソ科シソ属の植物で、植物学的にはシソと同一種に分類されるが、エゴマは人の保護下で安全な時期に畑に播種されるなど、その育成には人的栽培が不可欠である。エゴマとシソは、種実の大きさに違いがみられ、長さ 2.0mm を超えるものがエゴマであり、それ以下のシソ科植物とは区別される（中山 2014）。

近年の研究成果により、ダイズとアズキは北陸地方、中部地方、西関東地方では圧痕サイズが縄文時代中期に入り、野生種よりも大型化することが判明しており、その理由は縄文時代中期以前に開始された人的栽培の結果と考えられている（小畑 2016）。また、ダイズとアズ

キの野生種である現生のツルマメ・ヤブツルアズキと、ダイズ・アズキの種子の簡易楕円体積を比較した研究では、ダイズは40mm³以下が野生種、70mm³以上が栽培型、40～70mm³が栽培種と野生種の間中型、アズキについては30mm³以下が野生型、60～70mm³以上が栽培型、30～60mm³が栽培種と野生種の間中型とみなされている（那須ほか2015）。

山鳥場遺跡の同定結果はエゴマが6点（そのうち、5点は同一個体）、ダイズが2点、アズキが2点で、縄文時代中期後半の事例としては、松本盆地では初例である。ダイズは栽培型、アズキは野生型よりも若干大きい中間型（No.9）と野生型もしくは中間型（No.8）に分類され、さらには人的栽培が不可欠とされるエゴマが土器圧痕に確認できたことで、当該土器の製作場所の近隣においてエゴマ、ダイズ、アズキの栽培が行われていた可能性があり、長野県における縄文時代の植物利用を考えるうえで重要な類例の一つと言える。

また、第7号竪穴建物跡から出土したエゴマの圧痕および炭化種実が残る（試料No.1～5）唐草文土器の略完形個体（残存率90%、底部欠損）は、今回、エゴマと同定されたものと同じ圧痕を肉眼観察で土器表面に211点、裏面に99点、断面に99点を確認した。また、長野県立歴史館でX線写真を撮影した結果、今回同定したものと合わせて881点をカウントした。圧痕は、口縁部に貼付された突起および口縁部から胴下部にかけて、土器の表面・裏面・胎土中に万遍なく見られ、位置にも偏りが無い。この圧痕が全てエゴマであれば、唐草文土器はエゴマを含む粘土で製作されたと考えられる。第7号竪穴建物跡からは3,653点の土器片が出土し、このうち種実を含むと思われる圧痕のあるものは66点であったが、多量の圧痕がある土器は本例のみである。

種実を多く含む土器は、表2のとおり長野県内で6例目、シソ属果実（エゴマ）は3例目と少なく、当該土器はその重要な類例である。

時期	市町村	遺跡名	出土場所	器種	残存率	種実圧痕	点数
中期後葉	岡谷市	梨久保	55号住居跡	浅鉢形	1/2 個体	シソ属果実（エゴマ）	1514点（推計）
中期中頭	茅野市	頭殿沢	遺構外	深鉢形	小破片	シソ属果実（エゴマ） マメ科種子	31点 1点
中期後葉	岡谷市	目切	遺構外	深鉢形	1/8 個体	ササゲ属アズキ亜属	39点（推計）
中期後葉	茅野市	茅野和田	34号住居跡	深鉢形	不明	ミズキ核	100点（推計）
中期後葉	豊丘村	伴野原	33号住居跡	深鉢形 （埋甕）	口端部、胴下部の一部が欠損	ササゲ属アズキ亜属 ダイズ属 等	151点 3点 160点（合計）

表2 種実を多く含む土器の県内事例（（会田ほか2017）をもとに作成）

また、県内で種実圧痕の調査・研究を行っている会田進氏（長野県文化財保護審議会委員）によると、縄文時代中期の種実圧痕分析事例はこれまでに9例ある。

3 課題

- (1) 山鳥場遺跡出土土器に、圧痕が残る土器がどれくらい存在するのか。
- (2) レプリカ圧痕で同定されたエゴマ、ダイズ、アズキをはじめとする植物遺存体が、山鳥場遺跡の遺構・遺構外で検出されるか。
- (3) 種実圧痕が残る土器はどこで製作されたのか。持ち込まれたものなのか。

4 遺跡の詳細

地理的環境：

鎖川右岸段丘上、内山沢の形成した扇状地先端部に位置。標高約780m。

歴史的環境：

山鳥場遺跡から直線距離にして西側約1.5kmの位置、鎖川左岸には、ほぼ同時期の竪穴建物跡約100軒が検出された熊久保遺跡が存在する。

調査概要：

平成 28 年度の調査面積は 1,400 m²で、縄文時代中期後半から後期の竪穴建物跡 10 軒、中期後半から後期の土坑 86 基、自然流路 2 条を調査。出土遺物はテンバコ 45 箱、縄文時代中期後半の土器・石器が多数出土。土偶片が 4 点出土。平成 29 年度は隣接地で調査中。

5 公開

山鳥場遺跡現地説明会 於：山鳥場遺跡現地

平成 29 年 9 月 2 日（土） 午前 10 時から 12 時 午後 1 時 30 分から 3 時

全体説明 2 回（午前 10 時から 11 時、午後 1 時 30 分から 3 時）

- ・遺跡現地には駐車場のスペースがありません。当日は朝日村あさひ保育園よりシャトルバスを運行します（受付時間 午前 9 時 20 分 午後 1 時）。
- ・自転車や徒歩で来られる方は、公開時間に直接遺跡現地にお越しください。

参考文献

会田 進ほか 2017 「アズキ亜属種子が多量に混入する縄文土器と種実が多量に混入する意味」

『環境資源と人類』第 7 号 明治大学黒耀石研究センター

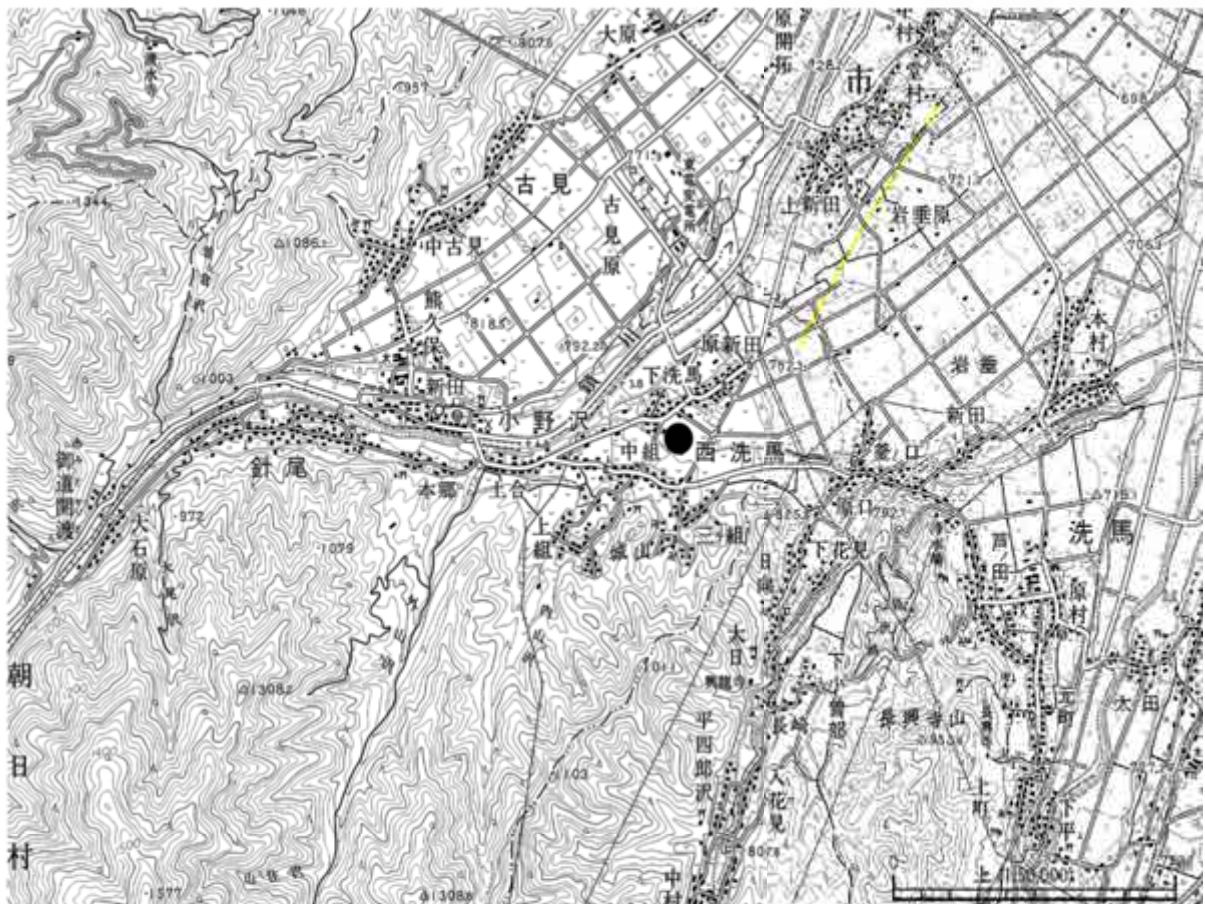
小畑弘己 2016 『タネをまく縄文人』 吉川弘文館

中山誠二 2014 「日韓における栽培植物の起源と農耕の展開」 『山梨県立博物館調査・研究報告

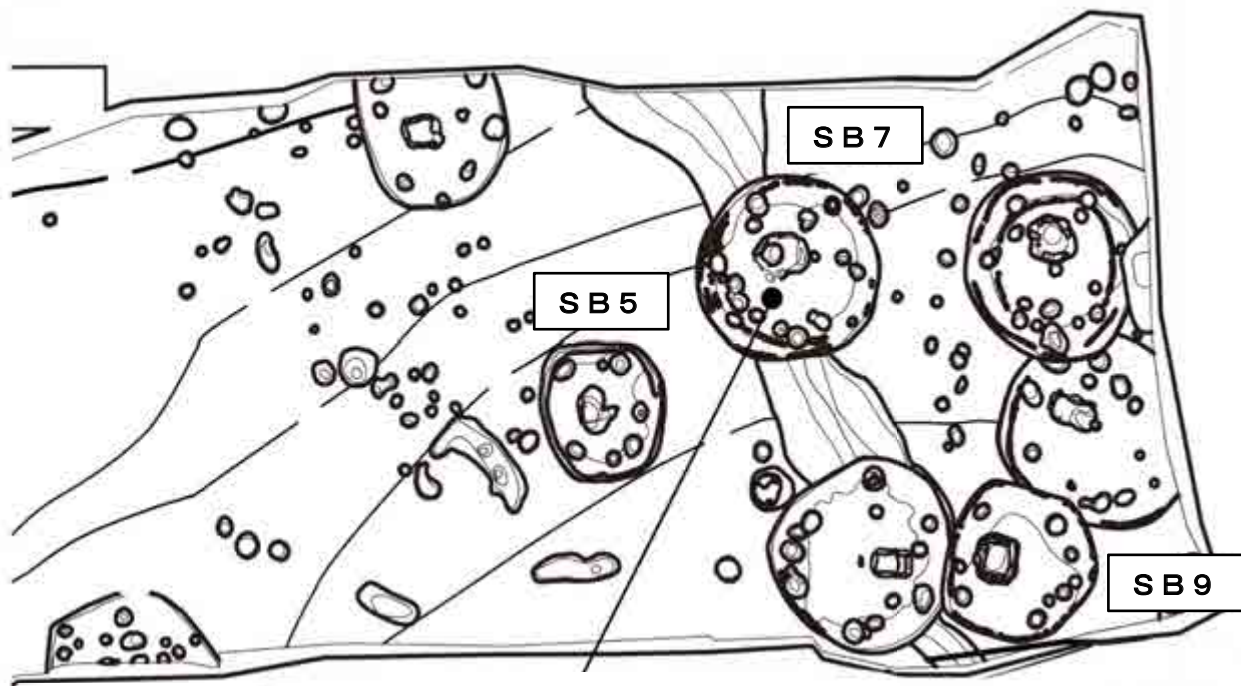
9 日韓における穀物農耕の起源』 山梨県立博物館

那須浩郎ほか 2015 「炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用」

『環境資源と人類』第 5 号 明治大学黒耀石研究センター



山鳥場遺跡の位置



エゴマを含む土器の出土位置

平成 28 年度調査区 (部分)



エゴマを含む土器の出土状況 (第 7 号建物跡)